

事例	リライト教材を使用した国語授業の理解
<p>来日3年目の定時制高校1年生が授業についていけないとのことで、授業中に通訳をするよう要請がありました。内容的に通訳だけでは難しいということを経験し、担任の先生に理解していただき、取り出しで国語の内容が分かるように、また3週間後の定期テストを目標にした授業作りをしました。</p>	

母語 フィリピン語

学齢 高1（東京都）

日本語レベル 小4レベルの漢字が読み書きできる。日常の日本語会話ができる。数学、英語、コンピュータの授業はついていける。

授業形態 取り出し 1：1の授業

リライト教材の作成

履修中の「ことばの力」外山滋比古の教材を簡単な単語と言い回し

（主語一述語（単文）、短い修飾語）で書き換え、フォントサイズも大きくした。また「アリが群がる」などの語句、「オウム」などフィリピンにも生息する動植物、「心臓」など共通理解が可能なものについては、インターネットから写真や絵を抜き出した。

タスクリーディング

リライト教材を音読する前に、口頭でクイズ（読解問題）を出した。

「アリはことばを話すか？」

「口ではなくて、何を使って話す？」

十分に興味を持ったところで、リライト教材を音読しながらクイズの答えを探した。音読中は、Tは興味を持って聞く態度を心がけ、相づちもいれながら、音読の意欲を高めた。

1章が終わり、クイズの答えの確認を口頭で行ったあとに、元の教材を広げ、黙読してもらった。授業で使われる読解のプリントを解いてもらったが、基本的な理解はできた。

一方で、期末試験の範囲のプリント（主語一述語、修飾語、漢字、熟語など）は、文法は母語（フィリピン語？英語？）での補助説明も入れた。文法、漢字、熟語は、「僕は（僕の母は）～」で始まる短文作りをすることで定着を図った。

指導後の様子

それまで国語の授業で文法の説明などがまったく分からないことで自信をなくしていたようだったが、「顔が明るくなった」（担任）、「主語と述語はもう大丈夫、などと話していた」（教科担当）などのフィードバックをもらった。